

『横笛滝口の草子』の古版本について

——御伽草子本解明に寄せて——

橋 本 直 紀

横笛と滝口にまつわる悲恋・通世の物語「横笛滝口の草子」(「横笛草紙」以下「横笛」とする)を取り上げ、些かの考察を試みる。考察の対象は刊本とし、刊本相互の関係を明らかに、位置付けようとするものである。それは、わたくしは先年、「横笛」の古活字版を二種まで見ることが出来、かつ子細に検討する機会を得たからで、その報告を兼ねて本稿を記すものである。

「横笛」については、既に優れた論考が幾つも備わっている。それらは「平家物語」との関連で述べられたもの、個々の伝本についてなされたもの、また影印・翻刻など様々である。それらのうち、大きく写本系と刊本系に分かれる「横笛」諸本を蒐集整理、御伽草子本の本文の性格を明らかに、位置付けるべく、早く詳密な論考を展開されたのは松本隆信氏であろう(「御伽草子本の本文について——小教盛と横笛草紙——」、「斯道文庫論集」第二輯、昭38・3)。氏

は、当時までに氏が確認され得た「横笛」諸本の総てを取り上げられ、周到な検討を加えられた。翻って近年、池田敬子氏は、その松本氏の成果を踏まえつつ、「室町諸本本文を詳細に追ひ、近世初期所謂御伽草子本の出現に至るまでの本文内容の流動の相を」考察すべく「横笛」についての論を発表された(「横笛草紙」本文の流動)、「軍記と語り物」第16号、昭55・3)。右、両氏は写本と刊本を同一視野に置いて、言わば大局的な観点から「横笛」諸本の系統付けを試みられたものとわたくしは考える。そして何れも、実に正鶴を射たものとも考える。

今回、わたくしが刊本のみを絞って「横笛」を考えることは、だからある意味で右両氏の論から見て、一歩後退した所為であるかも知れない。しかし、二種の古活字版と、御伽草子本、明暦刊本、都合四本を詳細に見れば、写本と刊本の交渉を考える前に別種の興味

が湧いて来るもので、刊本系諸本を新たに考察することは強ち無意味ではないであろう。本稿は、言わば「横笛」研究における基礎的作業の一環として記すものである。併せて最近とみに関心が寄せられている御伽草子本の性格解明の一助となるなら幸いである。

一

これまでに知り得た「横笛」の刊本は次の四本である。まず、二種の古活字版を掲げ、書誌を記す。

(一)「元和」刊古活字版丹緑本 一冊

赤木文庫蔵

栗皮原裝表紙。縦二四・一榎、横一六・八榎。題簽、後補墨「よこふへたきくちそうし」。内題「よこふへたきくちのさうし」。本文字高約二〇・三榎。版心には丁数のみを記す。全二四丁。每半葉一〇行、各行一七一・二一字（一九、二〇字詰の行が一番多い）。挿絵、片面七図、二ウ・七オ・一〇ウ・一五オ・一八ウ・二二ウ・二四オ。丹緑の彩色を施す。印記、巻首（一オ）および巻末（二四ウ）に「三井家」「宗辰所集」、表紙見返しに「アカキ」、裏表紙見返しに「赤木文庫」「アカキ」とある、三井家旧蔵書である。

備考一、川瀬一馬氏が「日本書誌学之研究」に登録、のち「増補古活字版之研究」に、戦後カリフォルニア大学へ渡って行った

と追記された本は、本書を指すであろう。或いは三井家には更に一本が存したのかも知れないが、どうもそうとは考え難い。

備考二、刊行時期について。本書は「弘文荘古活字版目録」

（「弘文荘待賈古書目」第四十二号、昭47・1）所載のもの、元和中刊とある。これは先掲川瀬氏に「元和頃の刊行と認められる」とあって、それと同じ判断に立つものである。松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（本稿第五節参照）にも元和頃刊として登録されている。

備考三、挿絵の色の方について。先記弘文荘目録に「丹緑の筆彩は丹・紫・緑の三色で、元和よりは若干後のものであろうが、少なくとも百数十年前の所為」とあるが、この紫は銀泥が丹に重なったものの様で、それが長年月のうちに褪色したものであるらしい。

備考四、以下、本稿では、本書を古活字版甲本と呼ぶ。

(二)「元和」刊古活字版丹緑本 一冊

赤木文庫蔵

黒色原裝表紙。縦二五・四榎、横一七・四榎。題簽、なし。内題「よこふへたきくちのさうし」。本文字高約二〇・一榎。版心には丁数のみ。全二四丁。每半葉一〇行、各行一八一・二一字（一九、二〇字詰の行が一番多い）。挿絵、片面七図、二ウ・七オ・一〇ウ・一五オ・一八ウ・二二ウ・二四オ。丹緑の彩色を施す。

よきふんたぶくあひさう
 中りあはのりもやきんまふい後の時ふ
 もよふんとて二人の女わうゆわをさうふも
 せはまあろとさあせんでせん——りりはく
 ちまのあひせくさうまうまのい一人の
 こふえうゆくとまうまうまうまうま
 なるうりともなうれうさうまうまひ
 まうていけうくす見あかふくうろふか
 凡かえくあはやまのいとたせまらあま
 の月入りあとなうれをれはるやこはま

横笛 古活字版甲本(1オ)

よきふんたぶくあひさう
 中りあはのりもやきんまふい後の時ふ
 もよふんとて二人の女わうゆわをさうふも
 せはまあろとさあせんでせん——りりはく
 とさあひのせくさうまうまのい一人の
 こふえうゆくとまうまうまうまうま
 なるうりともなうれあかまうまうまひ
 まうていけうくす見あかふくうろふか
 凡かえくあはやまのいとたせまらあま
 の月入りあとなうれをれはるやこはま

横笛 古活字版乙本(1オ)

備考一、本書は甲本とは別版である。活字は甲本のものより全体にやや細身であるが、一部共通するものがある様である。

備考二、ただし挿絵は甲本と同一の板木を使用したものと認められる。甲本も本書も刷面は極めて鮮明で殆ど遜色がない。

備考三、かつ、挿絵の位置(挿絵の前の本文の切れ目)も甲本と完全に一致する。

備考四、本書は全体に痛みがやや多く、本文および挿絵の一部が破欠している。特に二二ウの挿絵は右匡郭部分を欠く。

備考五、本書の刊行時期と甲本のそれとは、そう隔たるものではないであろう。言い換えれば、本書は甲本刊行からそう遅くない時期に、甲本にかなり近接して刊行されたものであろう。

備考六、本書は横山重氏が亡くなられてのち赤木文庫に加えられたものである。以下、本稿では、本書を古活字版乙本と呼ぶ。それと、

(目)御伽草子本

備考一、便宜上、御伽草子本としては渋川版を使用するが、渋川版の元版とされる、寛永頃とも寛文頃とも、また明暦・万治の頃(吉田小五郎氏「丹緑本覚書」、「民芸」昭46・4・9)とも言われる、間似合紙刷丹緑絵入横本(「横笛」は未だ発見されていないが)の謂でこの名称を用いる。

備考二、本書の挿絵は全六図で、古活字版のそれより一図少ないが、絵柄はよく古活字版に合致、完全に対応しているものと認められる（後述）。
そして、

（例）明曆四年山田市良兵衛刊本 一冊

国会図書館蔵

縹色無地表紙。縦二五・五種、横一八・一種。匡郭、四周单边、縦二一・七種、横一六・五種。内題「よこぶえたきぐちのさうし」。柱刻、なし。全二三丁。每半葉一四行、各行二五字内外。挿絵、片面三図、ニウ・七オ・一二オ。刊記「明曆四年戊九月吉日 山田市良兵衛開板」とある。

備考、本書の挿絵は、古活字版（また御伽草子本）のそれとは直接に繋がらない。
の、都合四本である。

二

以下、具体的な検討に入る。順序として、まず、二種の古活字版の関係について見る。漢字表記と仮名表記の違い、「お」「を」・「へ」「え」「え」「え」等の表記上の違いは除外するとして、本文上、次の如く、四七箇所に互つての相違が数えられる（上が甲本、下が乙本。検索の便宜のため、岩波大系本「御伽草子」の当該箇所を頁

・行数で付記する）。

- ① ちせんのせんしーちせんのけんし。(三四六・二)
- ② 身をしのけてー身ををしのけて(三四六・九)
- ③ こころそらにーこころはそらに(三四七・五)
- ④ たとへんかたそなかりけりーたとへむかたそなかりける。(三四八・四)
- ⑤ よしある御ふみとーよしある人の御文と(三四八・九)
- ⑥ 御返事あそはし給へかしー御返り事あそはしたまへかし(三四九・一五)
- ⑦ さまほとにーさるほとに(三五〇・九)
- ⑧ 世になし物にー世になし者に(三五〇・一〇)
- ⑨ せいわうほうかーまんさいーせいわうはかーまんさい(三五〇・一四)
- ⑩ はなのうへなる露よりもあやうきけんのはなのうへなる露よりもなをもあやうきけんの(三五〇・一六)
- ⑪ おもふひとなくさみてこそーおもふひとなくさみてこそ(三五一・三)
- ⑫ 又いかにさこころともーまたいかにさかふるとも(三五一・四)
- ⑬ いたはしやよこふえかーいたはしやよこふえは(三五一・一〇)
- ⑭ いかにかなしむへきものーいかにかなしむへきものとおと(三五二・三)

五一・11)

⑮へいしやうのやもめからすへいしやのやもめからす(三五

・15)

⑯みくにそふへてーみによそへて(三五二・15)

⑰ふけゆく月ももろ共にーふけ行月ともろ共に(三五二・3)

⑱うちみのかつそつもりけるーうららの数そつもりける(三五二

・4)

⑲ほめぬ人こそなかりけりーほめぬ人こそなかりける(三五二・

6)

⑳みねの木つとふさるの声松のあらしを枕にきけはしかの声よき

むによはる中(な)のねもかけひの水のたへく(く)にーみねの木つたう

さるの声松のあらしを枕にきけはしかのこえよきむによはる

中(な)のねはかけひのみすも絶(つ)く(く)に(三五二・7)

㉑さてもよこ笛かたつぬる事は夢にもしらすーさてもよこ笛かか

ゝる事は夢にもしらす(三五二・12)

㉒野末山のをくーの末山のおく(三五二・13)

㉓三条さひたう光門のしそくー三条さいたう左門の御しそく(三

五二・15)

㉔いぬいのかたと聞なれはうちのにまよひ出てーいぬいのかたと

聞からにうち野にまよひいて給ひ(三五三・6)

㉕思(おも)ひもよらぬ事なりとねんころにの給(たま)ひかきせすやうにうせ給

ふー思(おも)ひもよらぬ事なりとねんころにのろひてかきけすやうに

うせ給ふ(三五四・10)

㉖神やほとけのちかひなりとー神やほとけのちかひなりとて(三

五四・15)

㉗さきへとはかりいそきけりーさきえとはかりいそきける(三五

五・4)

㉘たき口とのにみ(み)の申さんーたき口殿にも(も)の申さん(三五五・11)

㉙ふたたび物を思はせんーふたたび物ををもはせん(三五五・16)

㉚をともせさりけりーおともせさりける(三五六・4)

㉛又(また)いろかはる事もありー又(また)いろよはる事もあり(三五六・6)

㉜いまのことくにわすれすーいまのことくにわすられす(三五六

・13)

㉝うらめしけにみてーうらめしけに見給(み)ひて(三五七・11)

㉞あかぬわかれもーあかぬわかれの(三五七・15)

㉟ふみならしたるさうりをはいはのうへにぬきすてーあらしの山

のおともよふちとりーはきならしたるさうりをはいはのうへ

にぬきすてー山あらしのをとたかくともよふちとり(三五八・

1)

㊱むさんやよこふえにしにむかひて手をあはせーむさんやよこふ

ゑは西にむかひ手をあはせ(三五八・3)

⑦ つま木とる山人河むかひにてあれよ〜とよはれと〜つま木とる山人の河むかひにてこれをみてあれよ〜とよはれと

(三五八・7)

⑧ 十七八の女坊の身をなげ給へるをあれよ〜よといひつれとかはよりこなたの事なればあはれき申はかりなしとこま〜とかたりければとも人もこれをき〜十七八の女房の身をなげ給いたはしさにあはれよ〜よといひつれとかはよりこなたのなればあはれき申はかりなしとこま〜とかたりければ友人のこれを聞(三五八・9)

⑨ むねうちさはきて〜むねうちさはき(三五八・12)

⑩ かくあるへきとしりたらはなとかはみもしみえさらん〜かくあるへきとしるならはなとかはけしきみえさらん(三五九・10)

⑪ わすかのゆめの世に〜わすかなる夢の世に(三五九・13)

⑫ 又かやうに〜かやうに(三五九・14)

⑬ こせうさんしよにゑらまれてつみふかしとうけたまはるかたふく日はなかそらにかへる事ありひとほしてふたたびかへらすさぞくるしみのおもひやられていたはしや〜後しやうさん所にゑらまれてつみのふかしとうけ給はるかたふく日はなかそらにかへる事のありぬとも人けんはして二たひと返らずさこそ

くるしみの思ひやられていたはしや(三五九・16)

⑭ のきをてらさる〜のき端をてらさる(三六〇・2)

⑮ かくてあるへきにあらされは〜さてあるへきにあらされは(三六〇・4)

⑯ かくる事おはき〜給へ〜かくる事をはき〜たまふ(三六〇・10)

⑰ あんしすましてゐたりけり〜あんしんすましてゐたりけり(三六〇・11)

以上の通りである。他に「からかなのうちへ〜からかきのうちへ」

(三四六・8)、「すてに舟〜すてを舟」(三五〇・16)、「いてはるか〜いてけるか」(三五二・16)、「なるむれは〜なかつむれは」

(三五三・9)、「こゝろまとはし〜こゝろまといし」(三五三・15)

の如く判断に苦しむ箇所が五例、「あまのよそ誠〜(乙本同じ)」

(三四八・14)と両本ともに誤った箇所(「成」とあるべき)が一例ある。

さて、本文として、甲本・乙本はどちらが良好であろうか。まず明らかに甲本の方が優れているのは①⑤である(前司・病鶴へいしやくの詠)。助詞・助動詞の違いによる小異とみなして支障ないのは(ただし係結びの法則を言うなら別である)②③④⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫の「とも人も〜友人の」、⑬であり、その字の有無が文意に直接影響を与えることなくまた表記が異なっても支障ないのは⑭⑮、⑰

(西王母は「せいわうほう—せいわうほ」両様に表記される)、①の「なくさみ—なくさめ」、②、③の「つとふ—つたう」、④、⑤の「しそく—御しそく」、⑥の「の給ひ—のろひて」、⑦、⑧、⑨、⑩の「山人—山人の」、⑪の「女坊—女房」、⑫、⑬、⑭である。誤植関係では⑮、⑯は甲本の明らかな誤植であつて乙本の方が良く、⑰の「る—ぬ」「せ—け」も乙本の方が良いが、逆に⑱の「の給ひ—のろひ」は甲本が良い。⑲の「中—中」は「虫」とあるべきで両本とも悪い。脱字関係では⑳の「こなたの事なれば—こなたのなれば」は乙本が「事」字を脱していて悪い。㉑、㉒はどちらが良いとも言えないが、㉓はその前後が七五調で続いているから、その意味では乙本が良い。㉔は文章上は何ら支障ないが、「ひと」と「ひとに」では読み手に与える感じは可成り違つてくるであろう。㉕、㉖の間には「われか思ひたつ事お夢ほともしるならば—(乙本同じ)」が入つて連続する文章である。良否は明確には言えないが、甲「よこふえか」は「しるならば」に、乙「よこふえは」は「かなしむへきもお」に係ると考えられるから、読み手への印象は變つてくる。㉗甲「そふへ」は岩波大系本頭注に「そびえ(聳へ)」「また「そばへ(戯へ)」のなまつたものか、とするが、意味は不明瞭である。同乙「よそへ」は「寄そへ」と当てるのかも知れないがやはりはつきりしない。ここは両本とも通りが悪い。㉘は乙「と」との方が若干

通りが良いであろうか。㉙のうち「中」については先記の通りであるが、それに続くくたりは甲本の方が自然であろう。㉚は乙本の方が良いとせざるを得ない。甲「夢にもしらす」の主語は滝口となるから、後文との関係上文脈に齟齬をきたす。このくたり、やがて横笛は滝口を尋ねて行くのだから、甲本作者の頭にそのことがあつて混乱を来たしたものか、或いは前文「(往生院にて) よるひるのつとめひまなくそ聞えける」に続けるべく意図したものが結果として後文に合わなくなつたのであろうか。しかし「さても」でこの文は始まつているから、やはり文章がこの前で切れていることは明白であろう。ただし乙本の「よこ笛か」は「よこ笛は」ともあるべきで、これは甲本を引いた乙本が「たつぬる」とあることの不自然さを訂正した名残りでもあろうか。㉛は三条斎藤左衛門であるから、甲本の明らかな誤植である。しかし甲・乙本ともに「へ(え・衛)」字を脱していることは大きな欠点である。㉜は乙本の方が通りは良いが優劣は言い難い。㉝、㉞も文章上の優劣は言い難いが㉟は甲「かはる」の方が良いであろう。㊱はやや大きい相違である。甲「ふみ」と乙「はき」はどちらでも良いとして、甲「あらしの山のお」と乙「山あらしのをとたかく」は何れが良いであろうか。この前文は「大井河のみきはなる、いはまつたひのほそ道を、三町はかりゆきすきて、ちとりかふちといふ所にて—(乙本同じ)」である。千

鳥が淵は嵐山の下方に位置する淵の名である。甲本作者はそのことを示し、印象付けるため、「あらしの山のおと」と効かせたのではないか。他方乙本はこれを不明な表現と見、「あらし」と「山」を入れ替えて「山あらし」とし、語調を整えて「の」「を」とかくとしたのではないか。甲本の表記が元来のものとする。⑧の乙に「これを見て」と入れてあるのは少しく緊張感を欠く様で、あとから付け加えられたものと思われる。同じことは⑨にも言える。⑩の乙「いたはしきに」は引き締まらないし、同「あれはくよ」は甲「あれよくよ」に比べて明らかに悪い。⑪甲「しりたらは」と乙「しるならば」はどちらでも良いとして、乙「けしき」は前後の文意を損い、悪い。⑫甲「かへる事あり」は下の「かへらす」と肯定・否定の関係で応じているのかも知れず、慣用的にこの様に言うのかも知れないが、むしろ「かへる事なし」とでもあるべきで、悪い。それ故乙は甲「あり」をそのまま活かし、自然と思われる形「ありぬとも」としたのであろう。しかしそれに続く部分は全体に乙が間延びした文章となっている。⑬は優劣を言い難い。⑭は「みやこまぢかくすめはこそ」(本同じ)に続くもので、「こそ」の結びとしては甲「給へ」の方が良い。⑮甲「あんし」は「案し」、乙「あんしん」は「あんし」が訛ったとも考えられるが、一応「安心」を当てると考えられる。両方とも意味は通るが、「あんしんすまず」

はやや熟さない表現である。甲の方が良いであらう。

この様に見ると、全体的には甲本・乙本とも誤植・脱字(誤植は甲本にやや多く目立つ)を含めてそれぞれ欠点を持つが、総じて甲本の方が通りがよく、文章も引き締まっているであらう。特に⑯および⑰以下のやや大きな相違のある箇所では、甲本の方が優れていると言える。古活字版は、本稿第一節に記した如く、形態上、また本節で見た文章上の特徴からして、やはり甲本↓乙本と考えられるのである。

三

古活字版と御伽草子本の関係について。

両者は非常に近い関係にある。前者は豎本、後者は横本という形態上の違い、また御本が古活字版最終丁の挿絵一葉とそれに続く結びの文章を欠くことは大きな相違であるが(このことは後述)、文章全体は両者、よく合致する。そして何より挿絵が見事に対応している。古活字版の第六図までと御本全六図の関係を、その文章中の位置と共に見れば(古活字版の引用には甲本を使用)、

「第一図」〔活〕あきのたのかりそめふしのよなりともきみままくらを見るよしもかな、ノ歌ノアト。〔伽〕(位置・構図トモ

古活字版ニ合致)。(三四七・二)

〔第三図〕「活」とのこひけるもことわりとこそ思ひけれ、ノ

アト。〔伽〕（位置・構図トモ古活字版ニ合致）。(三五〇・
3)

〔第三図〕「活」それかかきりのはなり、ノアト。〔伽〕よ
もほのく／＼とあければ、ノアト。（構図ハ古活字版ニ合致、
位置ハ小異アリ）。(三五二・二―三五一・16)

〔第四図〕「活」こまやかにこそおしへけれ、ノアト。〔伽〕か
くこそあいに給ひける、ノアト。（構図ハ古活字版ニ合致、位
置ハ小異アリ）。(三五五・3―三五五・6)

〔第五図〕「活」もたへこかれてなきあたり、ノアト。〔伽〕（位
置・構図トモ古活字版ニ合致）。(三五七・8)

〔第六図〕「活」夕かほの花のいろこそかなしけれ、ノアト。
〔伽〕（位置・構図トモ古活字版ニ合致）。(三六〇・3)

の様になる。伽本全六図のうち、構図は総て古活字版に対応、位置も第一・二・五・六図まで完全に合致する。第三・四図の位置が少しズれていることは気になるが、これは伽本筆者が古活字版に合わせるべく努めたに拘わらず、字詰め行詰めの関係でそうなったと解釈出来る。わたくしはこれら挿絵の照応を以て、伽本は古活字版を承けたものと、一往結論付けて良いと思う（一往としたことには理由がある、後述）。

では、伽本は古活字版を承けたものとして、甲・乙本のどちらに依つたものか、また、挿絵のことは措き、伽本の文章は古活字版のそれにどの程度合致するであろうか。結論を先に記せば、伽本は甲本に依つていると断言出来る。それは、第二節で見た、古活字版甲・乙本の相違箇所には伽本のその部分を重ねてみるとはつきりするであろう。①～⑭を伽本はそれぞれ、

- ① 越前のせんじ（甲本に合致、以下同）
- ② 身を押のけて（乙）
- ③ 心そらに（甲）
- ④ たとへんかたぞなかりける（乙）
- ⑤ よし有御ふみと（甲）
- ⑥ 御返事あそばし給へかし（甲）
- ⑦ さる程に（乙）
- ⑧ 世になし者に（乙）
- ⑨ せいわうほうが一まんざい（甲）
- ⑩ 花のうへなる露よりも。あやうき人間の（甲）
- ⑪ 思ふひとになぐさみてこそ（乙・甲）
- ⑫ 又いかにさかふるとも（乙）
- ⑬ いたはしや横笛が（甲）
- ⑭ いかにかなしむべき物と（甲）

⑮へいしやうのやもめがらす(甲)

⑯耳にそふえて(甲)

⑰ふけゆく月ももろ共に(甲)

⑱うらみの数ぞつもりける(乙)

⑲ほめぬ人こそなかりける(乙)

⑳嶺に木つたふさるのこゑ。まつマツの嵐嵐後後枕枕にきけばしかのこゑ。
よきむによはるむしのねも。寛寛の水の絶々に(甲、△印の部分
は御本独自のもの、後述)

㉑さても横笛が。かゝる事をば夢にも知ず(乙)

㉒のゝすゑ山のをく(乙)

㉓三でうさいたうさへもん(乙)

㉔乾のかたと聞なれば。うちのにまよひ出て(甲・甲)

㉕思ひもよらぬ事こととねんごろねんごろに宜よろひ。かきけすやうにうせたまふ
(乙・甲・乙)

㉖かみや仏のちかひ也と(甲)

㉗ささへと計はかり急いそげり(甲)

㉘たき口殿くちどのに物申さん(乙)

㉙二度物たじひをおもはせん(甲)

㉚音もせざりけり(甲)

㉛又またいろかはる事も有(甲)

㉜いまのごとくにわすれず(甲)

㉝うらめしげにみて(甲)

㉞あかぬわかれも(甲)

㉟ふみならしたるぞうりをは。いはの上うへにぬぎすてゝ。あらしの
やまのをと。ともよぶちどり(甲・甲)

㊱むざんやよこふえ。にしにむかひて手をあはせ(甲)

㊲つま木つまきとる山人。かはむかひにて。あれよくとよばれど
(甲)

㊳十七八の女はうの身をなげ給へるを。あれよとといひつれ
ど。川かみよりこなたををとをる事ことなれば。あはれさ申まをはかりなし
と。こまくとかたりければ。とも人ひと是こゝををき(甲・乙)

㊴むねうちさはき(乙)

㊵かくあるへきとしりたらは。などかはみもし見えきらん(甲・
甲)

㊶わづかの夢の世に(甲)

㊷又またかやうに(甲)

㊸こせう三さんしよにえらはれてつみふかしかたつこぶく日ひはななそらに
かへる事ことなししとははさららにしてふたふたゝゝかへらすさぞくるし
みのおもひやられていたはしや(甲、後述)

㊹軒のきをてらざる(甲)

④⑤ かくてあるべきにあらざれば(甲)

④⑥ かやうのことをばき、給へ(甲)

④⑦ あんしすましてあたりけり(甲)

の様になる。甲本に依っていること明白であろう。微細な、無視し得る相違、誤植の訂正等は伽本の処置と考えられる。特に⑤⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺の如き、大きい相違点に伽本を重ねて見る時、そう断定して支障ないと思うのである。ただし、大きい相違のうち②③④は乙本に合致しているから不審とも取れるが、②③は第二節で考えた古活字版乙本の処置と同様、伽本筆者にとつても不自然と感じられたであろう文脈上の齟齬を正したと考えられ、④はまず「光」字を明白な誤植と認め、さらに「へ」字を加えて本来あるべき形「さへもん」と改めたと考えるのが順当であろう。

④⑩の「嶺に木つたふ」は甲「みねの木つとふ」の「木」字を「こ」と読んだ、また読ませたいが為の改変と考えられる。当然甲「木」字は「き」と読むであろう。何れも文章上支障はない。「まつの風後枕にきけば」の「後」字は振かなが無いので、「あと」と読むのか「うしろ」なのか判断しないが、「あとまくら」で「跡枕」の意であろうか。「うしろまくら」ではやや熱くないであろう。④⑩の「かへる事なし」は、これも第二節で考えた如く、伽本筆者にも不可と感じられ、あっさり「あり」を、否定「なし」としたのであ

らう。古活字版甲本を、乙本・伽本とも不適當と考え、前者は「ありぬとも」に、後者は「なし」に改めたものと考える。慎重を期して、乙本に合致する微細な相違および②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺などをして、伽本は或いは、殆ど甲本に依つてはいるが乙本をも参照したのではないかと、という考え方も成り立つであろうが、わたくしはそうは考えない。

では、伽本は古活字版甲本を忠実に辿っているのかと言えば、必ずしもそうではない。②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺にも多少あるが、行論上支障なかるべく、煩雜を避けて掲出は暫時省略に従つた)、また④⑤(ママ)の例の如き省筆などは伽本の爲した改変・工夫として、次の所は大きく異なる。

⑦ 「甲」よきむによはる中のねも、かけひの水のたへく^{つゝ}に、うきよの事をかんしつゝ、いと哀をまきりける

「伽」よきむによはるむしのねも。寛の水の絶々に。かけてもならひぬ煙にそめなし。うき世の事を觸じつゝ。いと哀ぞ増りける(三五二・八)

④ 「甲」ならひの里にかくりつゝ、そめとのくきさき、御さんそ^う、ほうえ腕をさしすきて、つり殿三さう、まんのあらしのことば、をのつから、すゑをしらへ、たにの水をとすましく「伽」ならびの里にかくりつゝ。そめどのくきさき。御さんそ^う、ほうえ腕をさし過て。つり殿三さう、まんのあらしの、

をのづから。ぎん△△△△△△のこゑをしらべ。谷の水をとすましく(三)

五三・10)

⑨「甲」ふるうたを、思ひいでられつゝ、こゝろまとはし行程に

「伽」ふるうたを。思ひ出られける。たどろく△△△△△△と行程に(三)

五三・15)

右のうち、⑨は伽本の敢えてした独自補筆であろう。「寛の水」

で、水を「かけて」としたのか。⑩は両本とも通りが悪い。両本

「まんのあらし」は意味不詳、「松の嵐」の意であろう。それ以下は

伽本の方が若干通りは良い。伽本「ぎん」は「琴」の音読(甲)「こ

と」に対応するか)で、古活字版の通りの悪さを伽本はこの様に変

えたのであろう。⑨は文章上の優劣は言い難いが、伽本「思ひ出ら

れる」と、ここで一旦文章を切るよりは、古活字版の方が自然で

あろうか。この様に見れば、伽本は古活字版乙本をも参照したか、

という疑いは否定し得るであろう。

次に、先記、伽本が古活字版最終丁の挿絵とそれに続く結びの文

章を欠くことについて記す。古活字版最終丁オモテは挿絵(第七

図)、ウラにはまだ次の文章があつて物語は完結する。伽本が、

…たぎぐちぎつて。みやこちかくすめばこそ。かやうのことを

ばきゝ給へ。おほせなきそのさきにとて、よこふえがためにと

て。かうやさんに上りつゝ。あんしすましてるたりけり

で物語を終えるに對し、古活字版は右の件に続けて、

「甲」さる程に、ちゝはゝ、もたへこかれし御ふせい、なにゝ

たとへんかたもなし、のゝすへ山のおくまでも、わかこのたき

くちのあると聞ならば、たつねゆかんと、かうやさんにのほり

つゝ、あんしつをつくり、ほうたう院とを申ける、一もんの人

々も、かうやのたきくちひしりとて、世にたつとくを申ける

とある。

では何故伽本は挿絵第七図とこの件を欠くのか、考えられること

は、

(一)伽本の依つた古活字版は最終丁を欠いていた。

(二)最終丁は勿論あつたが、伽本筆者は第七図を見て、物語はその

前で終つたものと考へた(実際これで終りとしても何ら支障は

ないであろう)。絵はだから捨てた。

(三)最終丁は有つたにも拘わらず、伽本筆者(書肆と言ふべきか)

がわざと捨てた。

の三点であるが、(一)・(二)にはやはり無理があるろう(三)の場合、伽本

の本文は第五〇丁オモテで終つているから、そのウラに挿絵を入れ

ようと思へば入れられた筈である)。飽くまでも蓋然性の問題であ

るが、取り敢えずは(一)と考へておくのが穩当であろうか。

四

明暦版の性格、また御伽草子本と明暦版の先後について。

この問題については松本氏が既に述べておられる（同氏先掲論文、二〇〇—二〇五頁）。氏は伽本と明暦版の相違箇所を総て抜き出し検討を加えられた上で、「御伽草子本と明暦版とが相互に直接の關係をもっていたのかどうか、すなわち、どちらかが他方の本文に基づいて複製したのかどうかという点は、今はつきり断定するに足る傍証を發見し得ない。しかし、両本の本文の異同が、右に挙げただけのものであることよりして、ごく近い關係に立つものである点は認められよう。その場合、右に見てきた如く、両者の本文の相違箇所の大部分に亘って、明暦版の方に、文章の文法上の不備を訂正するという一貫した態度が窺われることによって、御伽草子本の本文の方が先出であったと考えたい」とされた。氏の書き振りは飽くまでも慎重であるが、わたくしも伽本の方が先であると考え。それは、松本氏が検討された、本文上から言えることの他に、挿絵の面からも裏付けられる。

本稿第三節に於いて古活字版と伽本の挿絵が見事に対応することが述べた。これに絡めて明暦版を見れば、およそ次の様なることが言える。

一、伽本の挿絵は古活字版のそれをそっくり承けている。

二、明暦版は僅か三図で、かつ構図はかなり相違する。絵柄は所謂近世風である。（対応を言うなら、活・伽第一図—明暦版第一図、同第四図—同第二図、同第六図—同第三図、となる。このうち明暦版第三図は活・伽のそれとは特に構図が異なっている）

三、伽本の挿絵は古活字版に依っていること明白であるから、もし明暦版の方が早く、伽本は明暦版に依ったとするなら、伽本は、本文は明暦版から、挿絵は古活字版から得るといふ、随分複雑な操作を経て成ったことになる（逆にこのことを明暦版の立場に立つて言うなら、明暦版は、本文は古活字版から、挿絵は古活字版を捨てて新たに作成したしヒントにはしたか、伽本は、その明暦版から本文を、挿絵のみは総て古活字版に負うて成ったということになる）。

しかし、通例に於いて、この様なことはあるであろうか。可能性としては一概に否定は出来ないが、釈然としない。やはり伽本が先であると考え。因に明暦版の文末は伽本のそれと同じである（古活字版にある最終末部を伽本同様欠く）。

以上で伽本と明暦版の先後ははっきりしたと思うが、伽本から明暦版へ繋がって行くことは、第三節でみた、古活字版に比して伽本

に特徴的な大きな相違の部分に明暦版を重ねてみると更にはつきりする。念のため記せば、第三節②③④⑤および⑦⑧の明暦版は各、

②みねにこづたふさるのこゑ、松のあらし後まくらにきけは、し
かの声、夜さむによはるむしのねも、かけひの水のたえ／＼に、
かけもてならひぬけふりにそめなし、うきよの事をくわんじつ
／＼、いと／＼あはれそ、まさりける(②と⑦は連続するので一緒
にして続けた)

③十七八の女ばうの、身をなげ給へるを、あれよ／＼といひつれ
ど、かはよりこなたをとをる事なれば、あはれき申はかりなし
と、こま／＼とかたりければ、とも人これをき／＼

④ごしやう三じうにえらはれてつみふかし、かたぶく日はなかぞ
らにかへる事なし、人はさらにし／＼てふた／＼びかへらず、さぞ
くるしみのおもひやられていたはしや

⑤かやうの事をばき／＼たまへ

⑥ならびの里にか／＼りつゝ、そめどの／＼きさき、御さんそう、ほ
うゑんをさしすきて、つり殿三さう、まんのあらしの、をの
づから、きんのすゑをしらへ、たにの水をとすさましく

⑦ふるうたを、おもひいてられける、たどろ／＼と行ほどに

とする。ほぼ完全に伽本についていることが分かるであろう。⑧
「ごしやう三じう」は伽「こせう三しよ」であるが、「五障三従」

の意で両様に表記される。①「きんのすゑ」のみ合致しないが、こ
れは伽「きんのこゑ」に不明を感じた明暦版が、「きん」を「きん
(琴)」と考え(前後の文脈から容易に見当がつく)、「きんのす
ゑ(琴の末)」と改めたのであろう(結果としてこの部分のみ偶然
古活字版にもどつたことになる)。

なお、本節を記すに際しては、第三節で古活字版と御伽草子本の
主要な相違を検討したのと同様の手続きを、古活字版と明暦版の間
にも行うべきであったかも知れないが、その作業結果は省略しても
行論上に誤りを来たす恐れは無いものと判断したので割愛した。そ
の作業を経て見た古活字版(甲本)・伽本・明暦版の關係は、松本
氏の言葉を借りて一言で言うなら、「この三本の本文は同系である
が、こまかく見れば、古活字版に対して、御伽草子本と明暦版には
共通した小異がある(「伝本から見た御伽草子二十三篇につい
て」の「横笛草紙」の条、『長沢先生古稀記念図書論集』、昭48、
三省堂)ということになる。そして、その「共通した小異」はまた、
伽本と明暦版がそれだけ強く結び付いていることの証左であると言
うことが出来るのである。

五

さて、これまで古活字版二種・御伽草子本・明暦版と、「横笛」

の刊本諸本につき、各の關係を見て来たのであるが、そのうち第三節では、挿絵を中心とした検討から、伽本は古活字版を承けたものと、一応結論付けて良いとした。その「一応」とした理由を以下に記す。特に本文を考える場合、古活字版から直ちに伽本へ、とすることに些か不安を感じもするからである。併せて、御伽草子本に纏わる諸問題、その最初の刊行時期、それが依ったテキストはどの様な本であるか、等々を解明するための手懸りの一となるなら幸いである。言わば、御伽草子本解明に寄せる、一試案として記すものである。

話を一旦「横笛」から逸らして、広く伽本全体を眺める。先ず、御伽草子二十三篇のうち、右諸点を解明し得るに足るであろう、伽本に先行すると思われる古版本を有する作品にはどの様なものがあるかを見る。新刊「御伽草子の世界」(奈良絵本国際研究会編輯、三省堂、昭57)所収の松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」に依って検索すれば、

- 文正草子―「寛永」刊本・承応二年刊本・寛文四年長尾平兵衛刊本／明暦四年刊本／「江戸前期」刊丹緑絵入横本・伽本／
- ・は松本氏が為された分類上の区別を便宜上この印で示す。
- ／は小分類内の、／は中分類内の本という風である。従って「文正」の場合、「寛永」刊本と伽本はやや遠いということに

なる)

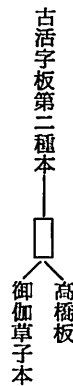
- 鉢かづき―「寛永」刊古活字版・「寛永」刊本屋弥右衛門刊古活字版・「寛永」刊本・万治二年高橋清兵衛刊本・伽本
 - 小町の草紙―「元和」刊古活字版・「寛永」刊本・「江戸前期」刊丹緑絵入横本・伽本
 - 唐糸草子―「慶長元和」刊古活字版・「寛永」刊本・伽本／「寛永」刊古活字版
 - 猿糸草紙―「寛永正保」刊本・明暦四年山田市良兵衛刊本・伽本
 - 物くさ太郎―「寛永」刊本／伽本
 - 蛤の草紙―「寛永」刊覆古活字版／伽本／明暦二年林長右衛門刊本
 - 梵天國―「寛永」刊古活字版／「慶安承応」刊本・伽本
 - 浦島太郎―「江戸前期」刊本(小本)／「寛永」刊本・伽本(他に未調査「江戸前期」刊特小本ハバリ国民図書館蔵)が載せられてゐる)
 - 横笛草紙―「元和」刊古活字版・「元和」刊古活字版(別版)／伽本／明暦四年山田市良兵衛刊本
 - 酒館童子―「寛永」刊本・「江戸前期」刊丹緑絵入横本・伽本
- の、「横笛」を含めて都合十一作品に、多寡は別にして古版本が存

する。そしてこれだけを見ても種々の興味が湧く。古活字版の存するもの、古活字版・寛永版の存するもの、それらに加えて明暦・万治年間に京都の書肆によって刊行されたこと明白なものなど様々であるが、わたくしはこれら諸作の総てにつき、作品毎に古版本相互の關係を明らかに、御本を加えて位置付ける作業の必要性を強く感じること。そのことが御伽草子本解明に繋がって行く有力な方法であると思う。ただし、先記の通り、各作品毎の伝本の多寡が甚だしいので、結論は容易には得られないであろうが。

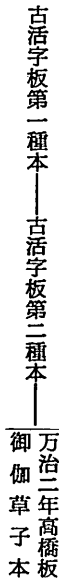
右十一作品のうち、目下のわたくしが興味を引かれるのは「鉢かづき」と「猿源氏草紙」である。二本とも「横笛」の状況に非常によく似るからである。即ち、前者は二種の古活字版・寛永版があった万治二年高橋版（京都）がある。後者は古活字版を（今の所）欠くものの、「横笛」と同じく明暦四年山田版（京都）がある。いま「猿源氏」については、古活字版を欠くことでもあり、わたくし自身の調査も余り行き届いていないので、今回は触れないこととして、「鉢かづき」の古版本の系譜を見ることで、「横笛」の場合を考えたい。

「鉢かづき」諸本の整理は既に成されている。松本隆信氏の「御伽草子本の本文について（一）鉢かづきの草子」（『斯道文庫論集』第三輯、冊39・3）および、同氏氏「鉢かづき草子」の古版本に

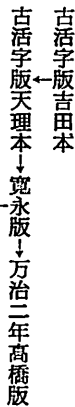
ついて（「ビブリア」第七十五号、冊55・10）がそれで、何れも委曲を尽くされた論である。ウは写本・刊本両方を、イは古版本に絞って考察したものの。いま、その結果のみを、本稿の興味の範囲内で引用、手抜きの謄りは敢えて受ける覚悟で学恩に浴することとする。まず、「鉢かづき」古版本の流れを松本氏はウ論文で、



と概観された。第二種本とは天理図書館蔵本の謂であり、高橋板は万治二年高橋清兵衛刊本を指す（この時点で寛永版はまだ知られていなかった）。そして当時までに氏が確認された古版本の系譜を、



と位置付けられた（系譜は下略）。第一種本とは吉田小五郎氏蔵本の謂である。万治二年高橋板と御本は兄弟関係にあるとの判断である。降ってウ論文では、



〔上方版〕

と、寛永版出現後の古版本の流れを整理された（ウ論文の仮想空白中に寛永版が入っている。系譜は一部略）。そして「なお、寛永版

や高橋版と同類の本文を有する本に、流布の御伽草子本があり」、その他「問題のある本が存するが、それらはまた別の機会に譲る」として、伽本そのものを系譜に入れることは新しい方の論考では控えられた。しかし、わたくしには氏の二つの論考および、先掲十一作品から推し量られる傾向、また本稿第四節までに述べて来た「横笛」についての愚考からして、未だはつきりしない御伽草子本の性格がおぼろげながら浮かんで来る様に思う。即ち、少なくとも室町期の古写本が存し（その数は多いほど、また著名な作品ほど有望であろう）、御伽草子本に先行する古版本が存する時には、

一、古写本に基づいて作られた古活字版がまず存したのではないか（基づいたと言っても、ある古写本一本をそのまま版に組んだという意ではない、むしろ多分に改変して言うべきか。古活字版は一種のみとは限らない、二次、また三次版までも作られた可能性がある）。

二、これまでに寛永（正保・慶安）版しか存しない（発見されていない）作品でも、更に古活字版の存した可能性があるのではないか。

三、逆に古活字版があつて寛永（正保・慶安）版を欠き、伽本や明暦・万治以降の版しか存しない作品でも、元来は寛永版があつたのではないか。

と考えられるのではないか。勿論これを御伽草子二十三篇の総てに当て嵌める訳には行かないし（例えば「猫の草紙」の如き）、右の様に考えること自体、無理のある、危険な臆説であるかも知れない。しかし、先掲十一作品の少なくとも半数近くについては、そう考えずして支障ない様に思うのである。この点、何卒大方の御教示をお願い申し上げる次第である。

では、話を「横笛」にもどし、これまでに述べて来たことおよび「鉢かづき」の例をも勘案した上で、現存する「横笛」諸版を系統付ければ、およそ次の様になるであろう。

古活字版甲本↓「寛永版」↓御伽草子本

古活字版乙本

明暦四年山田版

そして、古活字版↓寛永版↓伽本その他へ、の系譜を一つのモデルとして捉えたいと思う。「横笛」には必ずや寛永版が存したのであらう。その出現を俟つものである。

わたくしは、伽本「横笛」の本文を、古活字版にある最終末部を欠くという瑕疵を別にすれば、決して悪いものとは思わない。むしろ、よく古活字版の本文を留めた優秀な本文であると考える。そしてこれは、御伽草子二十三篇の少なくとも幾篇か（特に「鉢かづき」「小町の草紙」「唐糸草子」「蛤の草紙」「梵天国」など）についてとも言ひ得ることであると思う。従来、その刊行時期がはつき

りしないことも手伝って、ともすれば等閑視されて来た御伽草子本は、もっと評価されて然るべきではなからうか。

六

以上で「横笛滝口の草子」の古版本についての考察を終える。以下、「横笛」から派生する問題のうち、自らの課題として更に考え及ばねばならないことを整理する意で、古活字版の挿絵が後に及ぼした影響について、見通しを述べる。

古活字版「横笛」の挿絵は、甲・乙本とも同一板木を使用したものと認められることは本稿第一節に記した。このことは、甲・乙本がかなり近接して刊行されたことを窺わせるに足るが、そのこと自体は全く同一の作品内で為されたことであって何ら問題はない。問題は挿絵板木の他作品への流用ということである。仮名草子「薄雪物語」がそれである。

「薄雪物語」の古活字版には、最も早い十行本（挿絵なし）に次いで、十二行本Aと十二行本B（何れも絵入り）とが存する（両本とも勉誠社版近世文学資料類従仮名草子編13所収）。この挿絵につき、松原秀江氏は、十二行本Aは嵯峨本『伊勢物語』の挿絵を、十二行本Bは「横笛草紙」の挿絵を利用していることを指摘されている（「薄雪物語の挿絵」、「近世文芸」第三〇号、昭54・3）。正

に御説の通りで、十二行本B「薄雪」は「横笛」の挿絵を利用してゐる。松原氏は右の論考で、御伽草子本「横笛」の挿絵を使って、図版に出して「薄雪」との対応を示された。即ち、伽本「横笛」の第二図・第三図・第一図・第五図・第一図の順で挿絵が十二行本B「薄雪」に利用されていることを示されたのである。この伽本「横笛」を、古活字版のそれに置き替えることにより、松原氏の論はより完全なものとなる。いま古活字版「横笛」を目前している著の特権で結論だけを記せば、古活字十二行本B「薄雪」の挿絵は古活字版「横笛滝口の草子」のそれをそのまま使用したものであると言える。板木をそのまま流用したものと認められるのである。

このことはまた別種の問題をも喚起するであろう。即ち、広くは古活字版圈内における出版形態について考えさせられるものがあるうし、狭く見ても単に板木の流用ということのみならず、古活字版「横笛」また古活字十二行本B「薄雪」の刊年推定のための手懸りを与えてくれるものと思うのである。ただし、いまはこれ以上に話を進める用意も余裕もわたくしには無いので、取り敢えずはこれまでとし、追って別稿を立てたいと考えている。

それと、「横笛」そのものについても、特に神宮文庫本・天理本等の近世写本については述べたいことがあるが、今回は刊本に絞って論を進めて来たので、これも後日のこととしたい。